巻頭の挨拶

駒澤大学北海道教養部長　関　稔

ここ岩見沢の地に北海道教養部が開設されたのは昭和三十九年四月、過ぐる平成六年四月をもって丁度満三十年が経過したことになる。同一キャンパスに岩見沢駒澤短期大学が誕生したのは翌昭和四十年四月であった。教員諸氏の研究成果発表の場の一環として両組織合同の研究紀要である『北海道駒澤大學研究紀要』第一号が発刊されたのは昭和四十二年一月であった。爾来その書名をもって第二十四号（平成元年三月刊）まで刊行が続けられたが、短大廃止直後に刊行された第二十五号から『駒澤大學北海道教養部研究紀要』と書名が変更されて今日に至り、今般の刊行で通して三十号となる勘定である。節目の年を迎えた北海道教養部は幾つかの事業を織り込んで昨秋の佳日に式典を催したが、『紀要』には前例にならい記念号と特記していただいて祝祭に花を添えるという趣向ある。

『紀要』に加えて昭和六十一年から『論集』も出されるようになり成果発表の場が拡大したことは進歩と言うべきであろうが、研究諸条件の全てが充分に整備されてきたとは勿論言いがたい。それらは今後の課題として受け止めなければならないが、多くの不備を克服して論稿を作成された諸氏には敬意を表さなければならない。また、刊行に向けて貴重な時間を割かれた編集委員諸氏の労を多とし衷心からの謝意を捧げる次第である。

望むらくは四十周年記念号をも俟ちたいが、周知のごとく設置基準改訂のあおりで教養部の命運は楽観を許さない。かかる不透明な状況にあって部外からの教員についてまず問われるのは研究業績である、という事実がある。『紀要』『論集』の一層の活用を期待する所以である。かりに今後に変革があるとして、それに至るまでの残余の期間はさらに切磋琢磨することを自戒として、不遜ながら巻頭の一言とする。